

日露戦争期の妖怪・怪異

—「奇跡」「瑞祥」の役割—

辻 本 慶 樹*

Yokai and strangeness in the Russo-Japanese War
: On the Role of Miracles and Good Omens

Yoshiki TSUJIMOTO

要 旨

近代化が行われ始めた明治時代以降、妖怪や怪異といった前近代的なものは悉く排除されていった。しかし、民衆の間では心霊ブームや怪談ブームといった、明治政府が排除しようと試みた、いわゆるオカルト的なものが広く流行した時期も存在しており、政府自体も徹底して妖怪・怪異を排除したとは言い切れない部分がある。それは戦時下という限定的な状況において「奇跡」「瑞祥」という形で現れており、政府はそれを容認している。本論考では日露戦争期における「奇跡」「瑞祥」について、当時の新聞記事と博文館の『日露戦争実記』を中心に論じ、「奇跡」「瑞祥」という妖怪・怪異がどのように表現されていたかを取り上げ、それらがどのようなものであったかを考察するとともに、妖怪・怪異という存在を考察する。

キーワード：①妖怪 ②怪異 ③奇跡 ④瑞祥 ⑤日露戦争

- I、はじめに
- II、「奇跡」「瑞祥」とは
- III、日露戦争期の「奇跡」「瑞祥」記事の特徴
- IV、「高千穂」記事と「奇跡」「瑞祥」創作
- V、「奇跡」「瑞祥」と近代化
- VI、消えた「奇跡」「瑞祥」と残った「妖怪」「怪異」

I、はじめに

明治という時代が始まるとともに、日本政府が早急に行ったことは日本という国家の近代化であった。そのためには前近代の文化や制度を排除、または変革することが必要不可欠であり、その中には妖怪や怪異、迷信といった不可思議なものも含まれていた。明治政府は近代化の過程で

平成29年9月20日受理 *文学研究科国文学専攻修士課程 在学生

それらを否定し、徹底的に排除していった。しかし、政府とは異なり、明治時代以降、民衆の間ではたびたび心霊ブームや怪談ブームといった不可思議なものを楽しむ、あるいは信じるという状況が起こっており¹⁾、大衆文化という側面から見れば近代化の流れの中でむしろ、妖怪や怪異、迷信といった不可思議なものは広く流行していた時期があったと思われる。それでは、政府の側では明治以降、不可思議なものを排除するというスタンスをまったく変えなかったのかと言われれば、そうであるとは断言できない。なぜなら、戦争という状況下においてであるが、「奇跡」「瑞祥」という形で現れた妖怪・怪異については容認し、排除しようとはしなかったためである。本論考は、近代化の為に不可思議なものを排除していた政府が排除しなかった「奇跡」「瑞祥」というものについて、明治時代以降に日本が直接戦争に加わった日清・日露・日中戦争の中で、特にその言説が多く見られた日露戦争期を取り上げ、日露戦争中、月三回発行され、従軍記者を採用する、写真を大量に取り入れる等、企画の工夫で当時の戦争報道雑誌の中でもベストセラーと言われる博文館発行の『日露戦争実記』と、当時の新聞記事などを併せて考えることで、「奇跡」「瑞祥」というものがどのようなものであるかを論じていくとともに、妖怪・怪異のような明治政府が排除しようと試みた存在について考察していく。

Ⅱ、「奇跡」「瑞祥」とは

まず日露戦争期の「奇跡」「瑞祥」について見ていく前に、「奇跡」「瑞祥」という形の妖怪・怪異とは何なのかを、日露戦争と妖怪・怪異がどのような形で語られているかとともに考えていきたい。

日露戦争期の妖怪・怪異では軍隊狸と呼ばれるもの有名であるが、軍隊狸の話は『現代民話考 二 軍隊 徴兵検査 新兵のころ』²⁾ で確認できる。

「日露戦争の話。高松のじょうがん寺の狸が狸の親分でな、総指揮で戦争まで行っというな。年寄りから聞いた話では、狸が兵隊に化けて山つくったりしてな、そこへロシアの兵隊がどんどんあがってきよったら山がひっくりかえったというな。それから凱旋のときは狸までが提灯行列したというな。」

「波止波町の梅の木狸は、日清・日露戦争に一族を引き連れて出征した。日露の役では軍服をつけた一隊となる。露軍が赤い軍服を射っても当らず、赤い軍服が射った弾丸は百発百中」

「伊予の喜左衛門は明治三十七、八年の日露戦争に出かけた。それも小豆に化けて大陸に渡り、上陸するとすぐ豆をまくようにバラバラと全軍に散った。そして赤い軍服を着て戦った。なんせ敵の將軍クロパトキンの手記に、こげな文章があるそう。日本軍の中にはときどき赤い服を着た兵隊が現れて、この兵隊はいくら射撃してもいっこう平気で進んで来る。この兵隊を撃つと目がくらむという。赤い服には○に喜の字のしるしがついていた。」

どの話も、狸が兵隊に化けて日露戦争に参加したという筋のものである。また軍隊狸以外の話では『遠野物語』³⁾ にこのような話が収録されている。

「一五三 日露戦争の当時は、満州の戦場では不思議なこと許りがあつた。露西亜の俘虜の言葉

に、日本兵のうち黒服を着て居る者は射れば倒れたが、白服の兵隊はいくら射つても倒れなかつたといふことを言つて居たさうであるが、当時白服を着た日本兵は居らぬ筈であると、土淵村の似田貝福松といふ人は語つて居た。」

どちらも日露戦争中ではなく日露戦争後に民衆の間で語られたものであり、また日露戦争期にはこのような話は確認できていない。

では、日露戦争後ではなく当時どのような妖怪・怪異が語られていたのかを、目安として湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事集成』⁴⁾で確認してみる。日露戦争期の記事数は以下の通りである。

明治三六年：一七八件

明治三七年：七六件

明治三八年：一〇九年

明治三九年：一六一件

記事件数で言えば日露戦争中の明治三七、八年間で一八五件もの記事があるが、この中で日露戦争とセットで語られている記事数はたった二四件しか存在していない。そして、それらの記事の大半は、戦争に協力的な内容の「奇跡」「瑞祥」であった。

つまり、日露戦争期の「奇跡」「瑞祥」というものは戦争協力に用いられたものであり、明治政府が「奇跡」「瑞祥」といったものを排除せず容認したのも、戦争遂行や戦勝を祝う手段の一つとして利用するためであったと思われる。このような事例は日清戦争の際にもあり、その際には靈鷹という形で現れ、語られている⁵⁾。「奇跡」「瑞祥」は日露戦争に限らず戦争という状況下において、近代化の為に排除されるべき存在だった妖怪・怪異が、戦争協力の手段として国家が容認する形で語られた結果なのである。

Ⅲ、日露戦争期の「奇跡」「瑞祥」記事の特徴

日露戦争期全体の中でも、「奇跡」「瑞祥」記事が特に多いのが開戦直前から数か月間の日露戦争前期であった。記事の数は新聞記事一二件、『日露戦争実記』一二件であり、現在確認できる「奇跡」「瑞祥」記事の半数以上をこの期間が占めている。記事には同じ内容もあるため、この数を厳密なものともみなすことはできないが、戦争前期に記事が多かったということは確かだろう。それらの記事の中で、戦争前期の記事にはある傾向を見ることができる。

それは日清戦争や三韓征伐といった日本が過去に勝利した戦いを引き合いにした記事が多いということである。その記事の一部を抜粋する形でいくつか上げる。

「高千穂艦の瑞祥」『日露戦争実記一卷』一九〇四年二月二〇日

日清戦役の当時、靈鷹来て橋頭に止まりたる軍艦高千穂は、此たびも艦列を正して進行し居たる折柄、巨鯨浮びて艦の衝角に当り、巨鯨は其腹部を中断せられ、艦は何事もなく過ぎたるが、此事又瑞祥の一として士氣大に振へりと

日清戦争時に霊鷹がとまった軍艦である高千穂が、日露戦争の今回、航行中に鯨が衝角にぶつかったが船には何事もなかったことを、瑞祥のひとつとして兵の士気が高まったとする記事である。

「秋宮の奇瑞」『中国』一九〇四年二月二日

日本第一の軍神信州の諏訪神社の二の柱は一月三十日中途より自然に折れる神功三韓征伐の時も此事ありしと伝ふ日清役にも同じく折れたりと――

日本第一の軍神が祀られている信州の諏訪神社の二の柱が一月三十日に自然に折れてしまった。これは神功皇后の三韓征伐の際にもあったと伝えられており、日清戦争の際にも折れたということを書いた記事である。

「高千穂の霊異」『報知新聞』一九〇四年三月八日

去る明治二十七年端なくも日清干戈を交ふるや日向国高千穂山麓に鎮座せる霧島神宮より数万の巨燈列となし鷄林の空に彷徨ひ王師の擁護をなしけるとて人皆霊異に渴仰せしが此度露国と事を構へ満韓の戦雲日に急なるに及び去月八日夜十一時頃と覚しき頃数万の巨火粉々として東霧島山麓へ出現し見る、西北方に位置を替へつ、其の長さ里余に及び約三十分間を経て臙に消失せたりとて同地方にては神軍遠征に赴き玉ひしならんと噂し合へり――

明治二十七年に起こった日清戦争の際に、日向の国の高千穂山にある霧島神宮から数万の火が列を作ったということがあった。そしてロシアと事を構えることとなった今回、二月八日の夜十一時ごろに、数万の巨大な火が列を作り、三十分ほど時間をかけて消え、その地方では神の軍が遠征へ赴いたのだと噂となったことを書いた記事である。

注目しておきたいのは、どの記事も、過去に勝利した戦争の際に起こった不思議なことが、今回の戦争（日露戦争）の際にも起こっている、ということを書いていることである。これら以外の記事としては新聞記事では「秋宮の奇瑞」「高千穂の奇瑞」⁶⁾「神鳩の霊異」の三件、『日露戦争実記』では「高千穂艦の瑞祥」「伊藤海軍大将の戦勝談」「神鳩」「高千穂と鯨」「霊鷹の捕獲」の五件が該当している。

「奇跡」「瑞祥」記事の中でも、日清戦争や三韓征伐といった、過去に日本が勝利した戦いを一方、またはその両方を取り上げて書いているという割合は多い。そこには、日露戦争という戦争の特徴が反映されていると考えられる。

日露戦争において、ロシアと日本の国力の差は圧倒的に違い、日本が勝利することは難しいと感じる人間も日本の中に存在していた。実際、日露戦争開戦以前は主戦論と非戦論の両方が存在しており、七博士事件⁷⁾が起こるまではどちらかといえば非戦論よりであった。戦争開始直前から戦争が開始されてからは主戦論が中心となっていたであろうが、この時期においても大国ロシアとの戦争に対して敗戦の不安や恐怖を感じていた人間も少なからず存在していたのは間違いないだろう。過去に勝利した戦争の記事に用いている理由の一つがそこにある。それは、過去に勝利した戦争の際と同じことが起こっているという書き方をすることで、国力の差が激しい大国

ロシアとの戦争も同じように勝利することができるのではないか、と記事を読んだ人間に思わせるとのことだ。

それをただ述べるだけでなく「奇跡」や「瑞祥」といった不可思議なものと絡めることで、普通に書くよりもより効果的に読者がそう思い込みやすくするため、「奇跡」「瑞祥」と過去の戦争を絡めて書かれた記事が多いのではないだろうか。特に、近代国家を目指す中で最初に勝利した日清戦争を引き合いにだすことは、特に効果的だと考えられるが、それ以上に、もう一つの引き合いにされている戦争、三韓征伐はここまで述べた以外の重要な要素が込められている。

日露戦争は極端な見方をするならば、ロシアと日本が満州及び朝鮮半島の利権をめぐる対立から発展した戦争であり、言い換えればその支配権をめぐる戦争と見ることができるが、この朝鮮半島の利権を巡った戦争という部分が重要になってくる。

三韓征伐は神功皇后が新羅征伐を行い、朝鮮半島の広い地域を服属させた戦争であり、三韓征伐は日露戦争以前にも朝鮮半島が関係する際に度々引き合いに出されており⁸⁾、半沢秀一は「『三韓征伐』神話は、日本人の朝鮮観をその根底で呪縛し、日本と朝鮮の関係に強い影響を与えてきました。」⁹⁾と述べている。

三韓征伐神話は、朝鮮半島を日本が服属させた土地であるということを証明する（その事実が正しいことであるかは別として）ものであり、日本の土地である朝鮮半島の利権を奪おうとするロシアを、自国を侵略する卑怯で卑劣な国という形にすることができ、そうすることで、日本はロシアと戦争することの正当性を容易に確立することができる。

三韓征伐を記事に利用することで、戦争することの正当性を流布することができ、自国を守るという人々の義憤の心を上手く煽ることができるのは間違いないだろう。加えて、この三韓征伐神話は第二次世界大戦に日本が敗北するまで国定教科書に掲載され続けており、三韓征伐はそれ以前の人々は当然のように知っているため、これを利用するのは非常に効果的であることがわかる。その上、三韓征伐は「神話」という形であるため、「奇跡」や「瑞祥」といった神霊的なワードとの親和性は高く、「神話」と絡めて記事にすることでその記事を効果的に演出することができ、記事の説得性を増すことができるはずだ。三韓征伐神話は朝鮮半島の利権をめぐる戦争であった日露戦争でしか用いることができないため、日露戦争期の「奇跡」「瑞祥」記事の大きな特徴であると言えるだろう。

Ⅳ、「高千穂」記事と「奇跡」「瑞祥」創作

開戦直後までにはよく書かれた「奇跡」「瑞祥」記事であるが、日露戦争期全体を通して「奇跡」「瑞祥」の記事は、戦争中期、後期になるにつれて減少する傾向にある。戦争が始まり激化するにつれて、戦争への不安や恐怖を解消するという役割を担った「奇跡」「瑞祥」記事より戦況報告や戦死者報告の記事が求められるのは当然であり、また、実際の戦況を書く方が戦争への不安や恐怖を操作することは容易いため、記事数が減少するのは当然のことであるが、完全になくなったわけではなかった。

その少なくなった「奇跡」「瑞祥」記事の中の特徴として、戦争前期に書かれた「奇跡」「瑞祥」

記事を用いて創作した歌や韻文が多いということである。『日露戦争実記』の戦争文学欄に多く、特に「高千穂」に関係した記事の話を下敷きにしたであろうものが多数であった。実際『日露戦争実記』の一六件の記事の中で九件が「高千穂」に関係したものであり、記事は一般の人間が応募したもので、その中には従軍記者として実際に戦場へ向かう直前の田山花袋もいた。田山花袋は『日露戦争実記』の六巻に「進軍曲」を投稿しており、その内容は「高千穂の奇瑞」のいずれかの記事を読んで作ったと思われるが¹⁰⁾、他の奇跡・瑞祥記事と違ったところを見ることができる。

歌そのものへ触れる前に、当時の田山花袋の状況について少し触れておく。

花袋は一九〇四年の三月二十三日、坪内水哉から日露戦争従軍をすすめられ東京駅を出発し、写真師の柴田常吉とともに奥保鞏率いる第二軍へ従属する。そしてそこから約一か月の間広島に滞在している。この歌が書かれたのはちょうどこの期間であると考えられる、

この歌は一から三十一番までであるのだが、まず一、二番で「日向の国の雲高く そゝり立てる高千穂や 天の逆鉾今も猶 国の鎮めとなりけらし」(一番)「皇孫降臨のその昔 二千余年の春の月 山は静かに明け暮れて 平和の光満ちわたる」(二番)というように高千穂山と天孫降臨神話について冒頭で書くことによって、十一番から書かれる高千穂の霊火について触れやすくする下地を作ることに成功している。また、「そゝり立つ」という表現を一番と十三番の両方で用いることで、対応させていることがわかる。十一番までは泉岳寺や正成というような忠義を示すワードを用いることで戦うことの正当性や、ロシアの国土がいかに広くとも烏合の衆であると書くことで敵がたいしたことないとアピールすることに歌が使われ続ける。そして、十一番で「見よ―二月八日の夜 わが勇しき軍艦の 舳をふくみてひそやかに かの渤海に向ふ時」のように視点が高千穂の霊火が起きた二月八日の夜へと変わり、十三番からは高千穂の霊火についての具体的な描写が行われる。

十三番「かの高千穂の峯高く 天の逆鉾そゝり立つ こゝしき峯の其上に 俄かに燃えし火の光」
十四番「里のうたけに招れて 夜更けて酔ひて帰りにし 村の若者ゆくりなく 路のあかきに驚きつ」

十五番「顧みすればこはいかに とはに静けき神山の 峯にも尾にも美しく こゝしく燃ゆる火の光」

十六番「あるは一団空を覆ひ ある是一群山を巻き 烟火の光散るがごと 地雷水雷の裂けしごと」

十七番「音こそなけれ其光 声こそ立てね其焰 まこと戦争の其さまを 見たるに似たり眼のあたり」

十八番「靈験しるき山なれど 国の鎮の峯なれど かくとも知らぬ若者は あまりにことの怪しきに」

十九番「垣根の戸をば叩きつゝ 隣の人を呼び覚し あれ見よ山のかの火をと 遠く指さし示めしけり」

二十番「火影は既に峯を越え 韓国岳の彼方より 遠く御空を焦がしつゝ 西、満州の地を指し

て」

二十一番「また燃え上る火の焰 峯越え尾越え山こえて 燃えつ乱れつ靡きつ、 遂には遠し山の陰」

二十二番「かの黎明の消ゆるごと かの夕月の沈むこと たけの昔の影こめて 山はふたゝびもとの闇」

国の鎮めとなっている天の逆鉾がそそり立つ高千穂の峯の上に燃えている火の光を書くところから始まり、十四番では里の宴で酔っ払った若者がそれを見て驚いている。続く十五番では神山や神々しく燃えるといった表現で高千穂山の空で燃える火が神聖なものであるように描きだし、十六番、十七番では音も声も立てないその火が、まるで戦争を目の当たりにしたようだとしている。霊火を「火の光」「烟火」「焰」「火の焰」というようないくつもの違った描き方をしているところに、花袋の技巧を見ることができる。

また、酔っ払った若者の視点と読者の視点を重ねて書くことで、ここで読者と若者の視点を同化させることに成功している。十八、十九番で、高千穂が霊験ある山であり、国家鎮守の山であることを何も知らない若者が火のあまりの怪しさに隣人を起こして火を見ろと促している様は、若者という存在を登場させてその行動を描写することで、歌の中にある種の物語性を埋め込み、霊火の話をドラマティックに演出することを可能にしている。ここにもまた花袋の技巧を見ることができ、他の霊火記事を下敷きにした作品にない見られない部分である。

二十番から二十二番までは、空を焦がしながら西、満州の地へ山の尾や峯を越えて山の影へと消えていく情景を、表現方法を変えながら描くことでただの新聞記事であった高千穂の霊火をダイナミックに表現することに成功している。

山の陰に霊火が消えていくと場面は高千穂から、これから花袋が向かうであろう実際の戦場へと変わっていく。

二十三番「あゝ思ひきや燃ゆる火は わが日本のいくさ艦 旅順の敵を打挫き 沈めし水雷の火の影と」

二十四番「誰かは知らんわが軍の 行衛を守り給ふてふ 皇祖皇孫の勇ましき 戦の列の火の影と」

落ちて消えていったと思われた霊火が二十三番では日本の軍艦へとその姿を変え旅順の敵を打ち倒し、二十四番ではまるでその霊火が日本軍の行方を守っているかのように書いており、戦の列という表現は霊火の列という表現と重なる。このような書き方は、霊火を戦勝の兆しだとする他の記事と異なり、「火」という言葉をうまく用いることで、まるで霊火そのものが敵を討ち果たしたという印象を与えることに成功している。まさしく「高千穂の奇瑞」記事では描かれなかった「神軍の遠征」の様子を描いていると言えるだろう。他の霊火記事と比べても、このような書き方をしているものではなく、従軍記者として実際の戦場へ行くことが決まり、その直前であり今から自分が向かう戦場という場所を強く意識していただろう花袋だからこそできた書き方だ

ろう。小林一郎氏は『田山花袋研究—博文館時代(一)—』¹¹⁾で「進軍曲」について、「いずれにしても一般的な公約から一步も出ていないもので、個性的ではない。」という評価を下しており、文学作品としての評価はあまり高くないが、霊火記事を素材として創作された作品群の中から見れば、個性的で評価されるものであると考えられる。

このような「高千穂」関係の記事を下敷きにして創作した詩歌や韻文が、『日露戦争実記』には数多く投稿されているが、いくつか種類のある「奇跡」「瑞祥」記事の中でも、何故「高千穂」に関係したものが多く散見されるのか。そこには「高千穂」というワードに込められた神霊性があると考えられる。

記事に利用されている「高千穂」は現宮崎県にある高千穂山と軍艦の高千穂の二つであり、日露戦争期の人々が「高千穂」というワードを聞けばその二つを想像するだろう。そしてその当時は前者と後者の両方の「高千穂」に神霊性があったと考えられる。

山の方の高千穂は天孫降臨「神話」において邇邇芸命が天照大神の命を受けて天下った神聖な山であり、軍艦の高千穂は日清戦争の際に起きた「奇跡」「瑞祥」のエピソードを持つため、「奇跡」「瑞祥」が起きた軍艦として一時的に神霊性が付加されていると見ていい。特に、天孫降臨「神話」は、前項で上げた三韓征伐「神話」と同じく古事記、日本書紀に記されており、また教科書にも掲載されているため、当時の人々に天孫降臨「神話」は広く知られていたと思われる。また軍艦高千穂も日清戦争の話であるため、当時の人々が広く知っていた可能性は高い。人々の間で広く知られていたからこそ、「高千穂」関係の記事を下敷きにして創作された記事が多いのだろう。どちらの記事も「高千穂」というワードに集約されていくのは偶然である可能性が高いが、日清戦争の軍艦高千穂の話を検討した上で「高千穂の奇瑞」の記事を書いたと考えれば、この結果も納得できるだろう。

V、「奇跡」「瑞祥」と近代化

ここまで日露戦争期の新聞記事と創作記事を見てきたが、注目したいのは「奇跡」「瑞祥」といったものが「神話」という神霊性を持つものとともに書かれていることが多いということである。論者は近代という妖怪・怪異などの不可思議な現象が排除された時代に、「奇跡」「瑞祥」が排除されなかった理由がそこにあると考えている。特に日本神話と関連付けて書いているという点である。

妖怪や怪異・迷信といった不可思議な現象は、前近代の不要なものであり、近代化の邪魔をするものであったが、「神話」という神霊性のあるものと結びつくことによって、前近代の不可思議な現象存在は「神話」が持つ神霊性に取り込まれ、「奇跡」「瑞祥」という形へ姿を変える。日本神話は神道と深く関係しており、「神話」と結びついた妖怪・怪異は神霊性を持つことで間接的に神道とも関係を持つこととなる。そうなってしまえば、国家神道を掲げる政府側としては排除するわけにもいかないはずである。そのため、「奇跡」「瑞祥」といった形の妖怪・怪異現象を政府は排除しなかったのではないだろうか。むしろ、日露戦争当時には韓国併合への下準備も着々と行われており、朝鮮半島の支配の正当性をアピールしやすい三韓征伐神話は政府側も確実

に意識して残しているだろう。特に新聞や雑誌のような民衆が手に取りやすい媒体であればなおのことである。

妖怪・怪異存在が「奇跡」「瑞祥」と姿を変えることができるのは、ある限定的な状況に限られていると論者は考えている。なぜなら、「神話」と関連付けて妖怪・怪異現象を語る場合には何かしらの理由が必要であり、また「神話」と関連付けない場合であってもその内容が、政府が排除しない程度にメリットがあるものでなければならないからだ。そのため戦争協力、戦争賛歌といった形で政府にメリットのある書き方ができるため、戦争という期間に「奇跡」「瑞祥」というものが生まれるのだろう。

「神話」のような神霊性を持つものと結びつき、または政府が排除しない程度にメリットがある、いわば国家戦略的な形としての妖怪・怪異現象が「奇跡」「瑞祥」というものなのである。

しかし一方で「奇跡」「瑞祥」といったものは、前述した花袋の「進軍曲」中に出てきた青年のような、神話等の神霊性が付与されるものを知らない者にとってはただの怪しいものであり、それこそ政府が排除しようと試みていた妖怪・怪異、迷信の類に属するものと同じ存在である。仮に政府が「奇跡」「瑞祥」と認めたものであっても、そのような人間は「奇跡」「瑞祥」を信用することは確実にないだろう。そのため、政府が国家戦略的に「奇跡」「瑞祥」を利用するためには、平時から神話のような不思議な話をできる限り広く多くの民衆に認知させておく必要性があり、そうでなければ妖怪存在や怪異現象はその姿を「奇跡」「瑞祥」へ変えることはできない。つまり、「奇跡」「瑞祥」といったものを利用するには、多くの人々に不思議なものを否定せずに信じ込ませる必要がある。しかし、前述した通り明治政府は近代化のために不思議なものを排除しようとしており、必然的に「奇跡」「瑞祥」に用いる不思議なものは限られてしまう。そのため、民衆の間に広く知られており、なおかつ排除される対象ではなかった不思議な話——神話というものが「奇跡」「瑞祥」と関連付けて語られることとなったのではないだろうか。

Ⅵ、消えた「奇跡」「瑞祥」と残った「妖怪」「怪異」

一見、不思議なものや正体が分からないものを解明していく近代化と妖怪・怪異のような不思議なものは相性が悪そうに見えるが、前述したように近代日本では心霊ブームや怪談ブームのように度々オカルトが流行しており、むしろ時代が進み近代化するにつれて、出版技術の向上という理由もあるだろうが、妖怪・怪異の記事は増加傾向にある。明治政府は近代化の為に科学という手段で妖怪・怪異の正体を解明することで排除しようと試みたが、それはむしろ民衆の間に妖怪・怪異という存在を広める結果となり、人々の中から妖怪・怪異を排除するどころかいつそう関心を集めることとなった。明治政府が行った近代化によって妖怪・怪異のような不可思議なもの正体を解明して排除するという方法は、失敗に終わったと言えるだろう。

明治政府が失敗したように、妖怪・怪異のような不思議なものを完全に排除することはこの先どれほど近代化が進んだとしても達成されることはないと論者は考えている。なぜなら、妖怪・怪異は「奇跡」「瑞祥」とは異なり、その存在や事実を必ずしも信じさせる必要がない。今回取り上げた「奇跡」「瑞祥」のようなものはプロパガンダのような何かしら効果や影響を与えると

いう役割を必ず持っており、最低限その遂行のためには大なり小なり「奇跡」「瑞祥」を信じてもらう必要があるが、妖怪・怪異にはその制約が存在しない。それが妖怪・怪異と「奇跡」「瑞祥」の最も大きな違いである。何かしらの役割を持ってしまえば、その役割を問題なく発揮できる状況でなければ、その存在価値は大幅に減少してしまい、存在することすら困難になる。今回の「奇跡」「瑞祥」であれば、ロシアとの戦争期であり、なおかつ、ある程度その記事を信じている層が存在しているだろうという算段が立てられる状況であった等、諸々の要素が揃っていたためその存在を確立することができた。そのため、今回取り上げた「奇跡」「瑞祥」をそのまま別の戦争期に見ることは困難であろう。しかし、妖怪・怪異はそのような制約は一切なく、ただ不思議なものであるというほんやりとしたものであり、そこにどのような意味や役割を与えるかによってその姿を変える。その姿がどのようなものになるかは、どのような役割を与えられるか、何と関連づけられるか等によって変わり、多種多様であることは間違いない。役割や制約を持たない存在の自由性、多くのものに姿を変えることのできる多様性、この二つが妖怪・怪異の魅力であり、その存在を定義する難しさであり、そして、はるか昔から現在に至るまで人々の間で生き続けている理由なのである。

〔注〕

- 1) 京極夏彦『妖怪の理 妖怪の檻』角川書店 二〇一一年七月二五日 巻末の妖怪年表より
- 2) 松谷みよ子『現代民話考二 軍隊 徴兵検査 新兵のころ』ちくま文庫 二〇〇三年五月七日
- 3) 柳田國男『遠野物語』文藝春秋新社 一九四八年十月一日
- 4) 国立国会図書館並びに日本新聞博物館が所蔵する国内および海外の邦字新聞から、明治年間（四十五年七月末まで）に掲載された怪異・妖怪事件の記事を採集し、時系列に収録したもの。採集対象紙は日本国内一七七紙、海外十四紙。
- 5) 黄海海戦終結後、軍艦高千穂のマストに一羽の鷹が止まり野元軍左衛門によって捕獲され、後に神の使いである霊鷹として明治天皇へ献上された。伊東巳代治がこれを神武東征の際に現れた金鷄に見立て「霊鷹記」を作ると、多くの漢学者が霊鷹に関する漢詩文を作った。「平成二八年度 二松學舎大学資料展示室 企画展図録 三島中洲と近代 其四 — 小特集 戦争と漢学」より
- 6) 「高千穂の霊異」と同じ内容の記事が五つあるため、重複記事としてそれらの総称を「高千穂の奇瑞」と表記する
- 7) 一九〇三年六月に戸水寛人・富井政章・寺尾亨・高橋作衛・中村進午・金井延・小野塚喜平次ら七人の東京帝国大学教授による日露開戦論「七博士意見書」が発表され、開戦論が勢いを増したとされる事件・事件後、世論が一気に主戦論へ傾いたとされ、新聞や雑誌も主戦論へとなっていった。ただし、『平民新聞』のように非戦論を唱え続けた新聞も少なからず存在することも留意しておくべきことであろう
- 8) 豊臣秀吉の朝鮮侵略の際に出征した日本の武将の日記に、三韓征伐神話を用いて鼓舞する内容があったことや、本居宣長が三韓征伐神話に基づいて朝鮮が元々日本の属国であったと主張しているなど古い時代から三韓征伐神話是用いられてきた。
- 9) 「神功皇后と「三韓征伐」神話と朝鮮の植民地化」『古代日本海文化改題 古代史の海 第四一号』「古代史の海」会 二〇〇五年九月二〇日
- 10) 進軍曲の最後に「二月八日の夜日向国高千穂の峯に靈光の見えしは当時諸新聞の載するところ、税所霧

島神宮宮司が報告に其事を明記せり」とあるところから、田山花袋は高千穂の霊火について知っていたことは確実である

11) 小林一郎『田山花袋見研究一博文館時代(一)一』一九八七年三月二十五日 桜楓社

※本論考では読みやすさを考慮したため旧漢字はすべて新漢字へ直してある

〔参考文献〕

- 1) 京極夏彦『妖怪の理 妖怪の檻』角川書店 二〇一一年七月二五日
- 2) 松谷みよ子『現代民話考二 軍隊 徴兵検査 新兵のころ』ちくま文庫 二〇〇三年五月七日
- 3) 柳田國男『遠野物語』文藝春秋新社 一九四八年十月一日
- 4) 湯本豪一編『明治期怪異妖怪記事集成』図書刊行会 二〇〇九年一月三〇日
- 5) 「神功皇后と「三韓征伐」神話と朝鮮の植民地化」『古代日本海文化改題 古代史の海 第四一号』「古代史の海」会 二〇〇五年九月二〇日
- 6) 小林一郎『田山花袋見研究一博文館時代(一)一』桜楓社 一九八七年三月二十五日

〔Summary〕

This paper discusses the miracles and good omens in the Russo-Japanese War. Yokai and the strangeness was eliminated by modernization since Meiji period. However, the occult was very popular among the ordinary people. Meiji government didn't eliminate the miracles, the good omens and Yokai. They appeared in the specific war period. This paper discusses the miracles and the good omens in the Russo-Japanese War using "Nitrosennsoujikki" and the newspaper articles at that time. And I study the miracles and good omens in the Russo-Japanese War and Yokai and strangeness.

Key words : ①Yokai ②strangeness ③miracle ④good omen ⑤the Russo-Japanese War